

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13025

研究課題名（和文）標準語と方言の関係から見る「親密さ」と「疎遠さ」 - ドイツ語圏スイスを例にして

研究課題名（英文）Intimacy and Estrangement in the Context of the Relationship between Standard Language and Dialect

研究代表者

大喜 祐太 (Daigi, Yuta)

近畿大学・総合社会学部・准教授

研究者番号：60804151

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ドイツ語圏スイスで使用される書きことばの分析を通じて、テキストに出現する方言や変種の持つ意味を考察することにあつた。第一に、ドイツ語圏スイスにおける標準語と方言の関係の考察を行い、考察対象をスイス式標準語で書かれた各種テキストに定め、テキストに出現する方言的要素について、特に質的観点からの分析を試みた。続いて、文学作品のテキストに見られるスイス特有の語彙や構文、言い回しを調査することを通して、言語規範や言語使用者の規範意識について考察した。それらを踏まえ、ドイツ語圏スイスのテキストを分析し、地域的特徴がどのような文体的効果を与えているのかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、スイスの書きことばの地域的要素を見つけ出すために、オリジナルの小説と後に出版された版を比較対象とすることによって、校閲者がどのような特徴を「スイス語法」とみなしているのかを検討した。テキスト中で用いられるいくつかの語彙や表現は、ドイツで一般的であるものに置き換えられていることがわかった。書きことばの中の方言的要素は、標準語から逸脱した単なる「誤用」と認識され、後世の版で書き改められることもあれば、ひとたび意図的に用いられるときには、受け手に特定の印象を与える表現技法にもなり得ると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the meanings associated with dialectal and variant elements in texts through the analysis of written language used in the German-speaking area of Switzerland. Firstly, an examination was conducted on the relationship between standard language and dialects in the German-speaking area of Switzerland. Various texts written in Swiss Standard German were selected as the subjects of analysis, and an attempt was made to analyze the dialectal elements in the texts, particularly from a qualitative perspective. Subsequently, an investigation was carried out to explore the distinctive vocabularies, constructions, and expressions found in literary works, which shed light on language norms and their awareness among language users. Based on these findings, the texts were analyzed to consider the stylistic effects created by regional features.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：スイス ドイツ語 地域的要素 方言 標準語 構文

1. 研究開始当初の背景

a) 「誤用」から文化的・言語的多様性へ

スイスドイツ語研究者の Hans Bickel は、次のように述べている。「ドイツの標準ドイツ語の語彙という一つの大きな核があるにもかかわらず、無標のドイツ語を書くことは不可能である。書き手は、常に自身の出自についての手がかりを与えている。」日本語や英語にも地域差が存在するように、ドイツ語圏でも各地域によって異なるドイツ語が用いられている。特に、スイスで話されている方言としてのスイスドイツ語は、ドイツの人々でも理解できない場合があるほど、音声・語彙・文法面でドイツの標準ドイツ語と隔たりがある。また、スイス文学を代表する劇作家である F. デュレンマットは、1967 年に著した「言語についての個人的なこと」と題するエッセイの中で、つぎのように述べている。すなわち「(ドイツ語圏では) 諸々の方言は生き生きと残ったまま、人びとの言語的潜在意識の中に活力を保ったまま作用し続けており、(...) そのため、一つの学問的中心はなく、一つの文化的中心というものもない。それゆえ地方というものがない」。こうした状況から、ドイツ語は、複数中心的言語と呼ばれる (cf. Meyer & Bickel 2006)。19 世紀頃からすでに、書きことばにおける地域的特徴を見出す研究が出現していたが、それらの特徴は標準的なものから逸脱した誤用とみなされてきた。しかし近年、個別言語学や方言学の観点から、地域毎に異なる特徴を持つドイツ語の研究が進み、Ammon et al. (2004) の『ドイツ語の変種辞典』(Variantenwörterbuch des Deutschen) や Bickel & Landolt (2012) の『スイスの標準ドイツ語の辞書』, Christen et al. (2014) の『ドイツ語圏スイスの小言語地図』として結実し、ドイツ語圏の地域的特性の再評価が行われている。つまり、地域的特徴を備えたドイツ語は、単なる一つの方言としてではなく、ドイツ語圏の文化的多様性の観点から論じられるようになってきた。

b) 計量テキスト分析の方言研究への応用

ドイツ語の量的言語調査は、ドイツ・マンハイムにある「ドイツ語研究所」(IDS) が提供する大規模言語コーパス「COSMAS II」や「共起関係データベース(CCDB)」さらにベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーの「DWDS」などを通じて日本でも盛んである。言語資料の検索や閲覧に焦点を絞るものに限らず、たとえば、樋口耕一氏の開発した、2001 年からフリーソフトウェアとして公開されている KH Coder は、日本語や英語の他にも、仏独伊蘭西語にも対応しており、あるテキストの言語的特徴を詳細に扱うことを可能にした。そうした量的手法を導入した方言的要素の調査は、Dürscheid & Businger (eds.) (2006) などの新聞・雑誌のスイス語法の分析に見られるものの、十分に進められているとは言い難い。さらにそうした理論的分析だけでなく、テキストに現れる方言的要素の持つ効果については、そもそもあまり議論されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ドイツ語圏スイスにおける書きことばの言語的特徴を明らかにすることによって、テキストに出現する方言的要素の持つ意味を考察することにある。そのため、第一に、計量テキスト分析の手法を利用して、スイスに特徴的な言い回しを特定することに努める。たとえば、表 1 の通り、小説『ハイジ』のアルプスのシーンでは、スイス語法 (Helvetismen) は、特に名詞において多用され、それは読み手に対してある種の「親密さ」を与えるものとなっている。一方、スイス的要素を出す必要がないドイツ・フランクフルトのシーンでは、スイス語法が避けられていると推測されるのだが、それでも、意図せず使用しているように見えるスイス語法 (特に文法的要素) がある。

表 1: 『ハイジ』における使用箇所別スイス語法の効果

	使用箇所	項目	効果
スイス語法 (Helvetismen)	アルプス	語彙的 (名詞)	意図的? ⇨ 親密さ?
	フランクフルト (特に地の文)	文法的 語彙的 (名詞以外)	非意図的 ⇨ 誤用?

このように、テキスト中の方言・言語的地域性は、食べ物や自然、社会制度といった文化や習俗に関する語彙として出現するとき、読み手に対してローカルな情報を提供する。それと同時に、その表現自体が読み手を惹きつける心理的な「親密さ」を生んだり、あるいは反対にその表現に馴染みのない者にとっては「疎遠さ」を印象付けたりすることもある。それゆえ、書きことばの中の方言的要素は、標準語から逸脱した単なる「誤用」と認識されることもあれば、ひとたび意図的に用いられるときには、受け手に特定の印象を与える表現技法にもなり得る。本研究では、文章中の方言的要素を抽出し、テキスト間で比較を行うことによって、方言や変種が使用される意味や効果を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

(手順 1) スイス的語彙の抽出：スイスの特徴を明らかにするために、Bickel & Landolt (2012), Meyer (1989), Ammon *et al.* (2018), Kaiser (1969) および『スイス方言辞典』(Schweizerisches Idiotikon) を参考にして、スイスドイツ語およびスイス式標準ドイツ語の語彙を抽出し、名詞、副詞、動詞、形容詞、前置詞、構文や言い回し、文法項目に分類する。1. の中で触れた COSMAS II, CCDB, DWDS などを用いて、新聞や小説、講話といったさまざまなテキストを対象にした分析を行う。各テキスト種別を見ても、使用される語彙や構文に相違があり、たとえば新聞にはスイスの語彙が多く含まれることが分かっている。

(手順 2) 語彙の用法分析：テキストの中の出現頻度の高い語の組み合わせを調べる。ドイツのドイツ語とスイスのドイツ語を対象にして、両地域のドイツ語の語彙には、どれほどの共通要素があり、また、相違があるのかをテキスト間で比較する。出現箇所(会話文か地の文かなど)別やテキスト種別に地域的要素の使用率を調べることを通して、方言的特徴が与える効果を明らかにする。

分析に際しては、単に出現頻度が高い語彙を抽出するだけでなく、出現頻度の高い語の組み合わせを調べて、それらを比較する。一例を挙げると、「路面電車」(Tram) という語は、両地域(ドイツとスイス)のドイツ語に共通であるが、文法上の性(女性か中性か)が異なる。そのため、日常的に使用される語の組み合わせとして「路面電車に(乗る)」と述べる場合、ドイツでは、*in die Tram* となる一方、スイスでは、*ins Tram* となる。このような文法的差異を対象とするならば、語ではなく、語の組み合わせの相違を見る必要があるが、現在のドイツ語学研究では、こうした現象に対する量的研究は未だ多くない。

また、調査を進めていく過程で、地域的な要素だけでなく、ドイツの標準語とその他の言語(特に英語)に共通する要素を探る必要があったため、アンケート調査を利用した実験を通して、ドイツ語や英語の構文的特徴をまとめた。これについては、共同研究者の菅谷友亮氏と共に、以下 4. 研究成果の(2)にまとめた。

4. 研究成果

(1) この論考では、ヨハンナ・シュペーリの『ハイジの修行・遍歴時代』原書版の地域的要素を見つけ出すために、後に出版された版を比較対象とすることによって、校閲者がどのような特徴を「スイス語法」とみなしているのかを検討した。テキスト中で用いられるいくつかの語彙や表現は、ドイツで一般的であるものに置き換えられていることがわかった。たとえば、*es hat (it has)* 構文を *liegen (lie)* に変更したり、非分離で使用されていた動詞を分離動詞に修正したりするようなケースである。原書版や後の修正版でも、スイス的・地域的要素を醸し出す必要がないと思われる地の文やフランクフルトを舞台とする箇所ではスイス語法が避けられ、その傾向が Goldmann 版や Boje 版では顕著である。それに対して、原書版でも意図せず使用されているように見えるスイス語法もある。たとえば、フランクフルトのシーンで執事の Sebastian の仕草を描写する際に現れるスイス語法は、おそらく意図的なものではなく、Goldmann 版では表現が改められている。このように、書きことばの中の方言的要素は、標準語から逸脱した単なる「誤用」と認識され、後世の版で書き改められることもあれば、いくつかの語彙に限定して付される指小接尾辞のように、ひとたび意図的に用いられるときには、受け手に特定の印象を与える表現技法にもなり得ると考えられる。本論考の調査では、各版の比較において出現する異同をいくつか確認できたが、『ハイジ』という作品全体での傾向を見極めるためにはさらなる調査が必要不可欠であり、各版の量的分析については今後の課題とする。

(2) 本研究では、テキストの構文選択が言語間でどのようなパラメータに依存するのかということ明らかにするために、英独存在表現の生起条件を考察することを通して、実験にて条件を様々に変えながら文の容認度や選択率を計測した。パラメータとして、言語(英/独)、文形式(構文/所有/所在)、絵の視点(眼前/俯瞰)、時間性(一時/恒常)、対象の具体性(具体/抽象)、文の時制(現在/過去)、極性(肯定/否定)という観点から条件づけし結果を比較した。しかし、本実験では扱わなかった重要な指標として「定性」がある。実主語や場所句の定性が存在文の容認度に大きく関わり、特に *there* 構文では実主語の名詞句には基本的に「不定」または定でも「新情報」が来ることが知られている (cf. Milsark 1977, Ward and Birner 1995)。さらに、他のパラメータとして「有生性」や「場所句の有無」も関係しているかもしれない。今後の課題として、新たな説明パラメータを加えて分析することが望まれる。

<引用文献>

大喜祐太 (2021) 「『ハイジの修行・遍歴時代』のスイス的要素に関する覚書：標準ドイツ語版テキストとの比較を通して」ドイツ文学研究 53, 49-54.
菅谷友亮・大喜祐太 (2022) 「存在表現の生起条件に関する英独対照：実験的手法を用いて」日本言語学会第 164 回大会予稿集, 31-37.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大喜祐太	4. 巻 53
2. 論文標題 『ハイジの修行・遍歴時代』のスイスの要素に関する覚書：標準ドイツ語版テキストとの比較を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ドイツ文学研究	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅谷友亮, 大喜祐太	4. 巻 164
2. 論文標題 存在表現の生起条件に関する英独対照：実験的手法を用いて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本言語学会第164回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菅谷友亮, 大喜祐太
2. 発表標題 存在表現の生起条件に関する英独対照：実験的手法を用いて
3. 学会等名 日本言語学会第164回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	菅谷 友亮 (Sugaya Yusuke)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------